
ポケモン短編集

霜歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン短編集

【Nコード】

N7383T

【作者名】

霜歌

【あらすじ】

ポケモンの世界での些細な出来事を、短編集にしてみました。ポケモンとポケモン、人間とポケモンとのふれあいの物語。

しんぴのまもり（前書き）

ありきたりな話だし、一人称が10歳の女の子なのでなんか幼稚な文章になってしまいました！

テーマは「タマゴ」。別サイトに載せたものです。

しんぴのまもり

「育て屋さん……わ、たしの、クーちゃん……は？」

喉の奥に熱い塊が込み上げてきて、首の後ろがジンする。声を出す、溜まっていた気持ちをはじけ、爆発しそうだった。顔がカッと火照る中、育て屋のおじいさんの顔を見上げると、おじいさんもおでこに皺を寄せて目を光らせていた。そして、私の肩に「わの大きな手を乗せて、言った。いつもより、くぐもった声だった。」「ごめんよ、嬢ちゃん。おじいさんも、おばあさんといっしょにポケモンドクターに診せにいったんだけどね、もう、ダメなんだよ……。よくわからない病気なんだ」

その言葉を聞き終わらないうちに、腹から胸、喉へ激しい思いが込み上げてきて、私は大声で泣いた。……泣きたかったけれど、泣けなかった。情けないことに、口からは息しか漏れなかった。声にならない叫びは静かな嗚咽となって、涙と混ざり合った。

おじいさんが、私の頭をくしゃくしゃと撫でてくれたけれど、私はそれを振り払った。

みんなはそうやって、いつも私を子ども扱いする。いつも私を、私として見てくれない。身長が小さくても、私はもう十歳。よいいな同情なんて、いらぬ。

「おじいさんのバカ！ どうしてクーちゃんを見捨てるのよう！」
怒りと悲しみが混ざったわけのわからないものが、全身で暴れまわっていた。

流れる涙が、拭っても拭っても止まらない。

＊

私がハハコモリのクーちゃんと出会ったのは、今から三年前の夏だった。むせ返るような暑さの中、視界がゆらゆらと水のように揺

れていた、あの日。テッカニンの鳴き声が、青空いっぱい響いていた。

私は、隣町までお使いを頼まれて、長い道のりを汗を拭って歩いていたところだった。そこへ、威勢のいいトレーナーの声が聞こえた。

「ワカシャモ、？かえんほうしゃ？！」

「ハハコモリッ！」

ポケモンバトルだ！　と思ったとたん、胸が高鳴ってきた。私は、ポケモンバトルを見るのが好きだ。トレーナーとポケモンの真剣勝負を見て声をあげて応援するのは、とても気持ちがいい。

駆け寄ってみると、ハハコモリが戦闘不能になっていて、その前でワカシャモが胸を張って立っていた。

負けたポケモンを見るのは、いつも胸が締め付けられるような気がする。今も、負けたハハコモリの細くしなやかな葉の体は黒く焦がっていて、なんだか可哀そうだ。

私が心を痛めていると、短パン小僧がワカシャモをモンスターボールに戻し、倒れたハハコモリを見下ろしている少年に冷ややかな笑みを浴びせた。

「何度挑戦してきても、同じことさ。お前には、絶対に俺のワカシャモは倒せない。こんな日差しが強い中、そんなしょぼい虫ポケで勝負を挑んでくること自体、俺には信じられないな。ま、せいぜいその弱い虫で頑張りな」

ふんつと鼻を鳴らすと、短パン小僧は立ち去った。

なんとなく話しかけづらい雰囲気だったので、思わず私は茂みに隠れた。

「ちくしょう……」

少年はハハコモリを戻そうと、震える手でポケットからモンスターボールを取り出した。しかし、手がブルブル震えているせいで、うまくモンスターボールを握れない。ころりとモンスターボールがハハコモリの横に転がった。

「こんな、もの……!」

ギシリッと、硝子の破片を踏み潰したような音が少年の足元から響いた。はっとして、ハハコモリのそばのモンスターボールを見ると、ペしゃんこにつぶれていた。少年の握り締めた拳が、ぶるぶる震えている。

クー……とハハコモリが弱々しく鳴き、ゆっくりと起き上がった。その様子を見た少年はさらに機嫌を悪くしたらしく、モンスターボールの破片を蹴散らした。

「この役立たず! なんであの時かわさなかったんだ!? お前の炎嫌いにはうんざりだ! ったく……クルミルの時はまだ使えたのに、進化したとたん鈍くなりやがって……。能力が糞だな! 自分の体ぐらい自分で管理しろよ」

ハハコモリがびくりと肩を震わせるほどの、罵声だった。聞いている私まで、心が重くなるような……。

「ほら、お前の帰るボールはもうないんだよ! お前は俺の手持ち失格だ。とっとと行けよ」

ひどい、と思った。あの時、こいつは「かわせ」なんて指示は一つもしていなかった。相手の強さに圧倒させられて、突っ立っていただけだ。それをすべてポケモンのせいにするなんて、自分勝手にもほどがある。

そう思った私は、気がつけば少年の前に飛び出していた。

「かわいそうでしょ! タイプ相性も考えずに戦わせて、自分が指示をミスったくせに。逃がすなんて、トレーナー失格!」

「なんだよ、チビ!」

「ポケモンのせいにするなんて、人として最低! 頭を冷やしなよ!」

少年がしばらく黙り込んだので、「勝った」と思った……。のもつかの間、少年が感心して笑いながら、呆れたように首を振った。

「わかってないなあ」

「な、何がわかってないのよ。あんたこそ、ポケモンの気持ちをわ

かってないじゃない」

「そうじゃない。トレーナーでもない奴に、ポケモンと人間の何がわかるのかっていうこと！」

ふんつと鼻を鳴らして見下ろされて、なんだか不愉快になった。

面白くない。こいつの言うことが、よくわからない。それなのに見下されているような気がして、悔しかった。

「な、何よ」

「お前、さっき、？ポケモンを逃がすなんて、トレーナー失格？って言ったよな？」

「そうよ」

「やれやれ」

少年は、再び首を横に振った。

「じゃあお前は、使わないポケモンはボックスに放置して、可哀そうだと思わないのか？」

「ボックス？」

「そうだ。手持ちは六匹までだから、パソコンの預かりシステムに使わないポケモンを預けることが出来る。そこで、ポケモンはじつと呼ばれるのを待ってるんだぞ？ このハハコモリだって、俺が逃がさなければその運命をたどることになる。そんな人生が、哀れだと思わないのか？」

言葉が出てこなかった。ボックスの中で、いらないポケモンとして放置される。だとしたら、野生に戻してやった方がいいのかもしれない。だけど、何かつかかるものがあつた。

私の様子を見て、勝ち誇ったように少年が笑った。

「ほうらみる。だから俺は、ハハコモリのことを考えて逃がしてやってるんだ」

「でも……」

「まっ、お前みたいなチビにはまだわかんねーか」

少年は頭の後ろで両手を組み、ゆっくりと歩き出した。そして、振り返らずに最後にこう言った。

「ようするにさ、ポケモンにも裏があるってこと」

「ウラ……」

「ポケモンと人間が共存するためには、こういうことも必要なのさ」
何か言い返してやりたかったけれど、情けないことに何も言えなかった。ただ、あいつがしていたように拳を握り締め、ずっと震わせていた。

クー……と足元から声がした。ハハコモリは、泣いていたのだ。
鳴きながら、静かに泣いていた。あんなに傲慢な主人なのに、忠実に従っていたハハコモリを、私はいとおしく思った。

「いっしょに、帰ろ。『クーちゃん』……」

こうして、私とクーちゃんの物語が始まった。

＊

クーちゃんはとてもおとなしいタチだったが、ポケモンをつれているということで、私は学校のクラスでも一躍人気者になった。ほぼ毎日のようにクーちゃんを見に、学校の生徒が私の家に遊びに来た。

そんな日々が続いたある日。

同じクラスのガキ大将的存在の一人の男子が、ガメールというポケモンを連れて私の家へやって来た。そいつといっしょに何人も男子もついてきていて、はじめはわけがわからなかった私も、なんだか嫌な予感がしてきた。

こいつは、人気者の座をとられたことに、強い不満を感じている。そのことで、文句を言いに来たのだ。

「な、何か用？」

大勢の男子と話したことの無い私は、どうやら緊張しているみたいだった。

ガキ大将が、自分の頭の上に止まっているガメールを指差し、薄笑いを浮かべた。ガメールがガーツと鳴いたので、クーちゃん

は驚いて私の足の後ろに隠れてしまった。顔だけ覗かせ、様子を伺っている。

「お前のハハコモリ、俺のガーマイルと交換しろ」

「え？」

「交換だよ、交換。俺のガーマイルがお前のものになって、お前のハハコモリが俺のものになるの！」

「エ……」

「だーかーらー！ 何度も言わせるな！ 取替えっこだ！！」

背筋がすーっと寒くなった。別に、お化けの話をしているような寒気ではない。クーちゃんを手放すことに、ガキ大将の頼みに、恐怖を感じた。

「ク、クーちゃんを……」

激しい思いが湧き上がってきた。

「嫌だ！」

元はクーちゃんはあの横暴な少年のポケモンだったけれど、それを私がもらったんだ。あの少年から、私は確かにこのハハコモリを、クーちゃんを預かったのだ。今では、クーちゃんは私の生活の一部となっている。朝起きた時の草の香りも、クーちゃんの澄んだ鳴き声も、すべて私の生活と一体化している。誰が手放すもんか。こんな汚いガーマイルと、クーちゃんの価値を同じにしてほしくない。

「絶対に、嫌！」

「なんだとお？」

私が睨みながら大声で言っていると、ガキ大将の顔が真っ赤になった。周りの男子が、ひそひそと騒ぎ出す。

「やべえ、？ オーバーヒート？ がくるぞっ」

「お前らうるせえ！ 帰れ！」

周囲の騒がしさにガキ大将が怒鳴ると、男子たちは足早に帰っていった。

「おい、チビ。本気で言ってるのか」

「そうよ」

「泥棒のくせに」

「だ、誰がいつ泥棒なんてしたの！」

「お前がしたじゃねーか！ 俺のクラスの人気者の座を奪いやがって」

「そんなの、私の知ったこっちゃないわ。人のせいにしないでよ！
ますますこいつの顔が赤くなってきた。思い通りにならない悔しさに、涙まで浮かべている。唇がわなわなと震えていた。

「言ったな……覚えとけよ！」

ガキ大将はくると私に背を向け、他の男子たちと同じように足早に帰っていった。

「勝った」と思った。ガキ大将なんて、化けの皮が剥がれればどうせそこら辺の男子と同じなんだ。クー？ と、クーちゃんが私の足元から私の顔を覗き込んだ。

「あはは。クーちゃんは、ずーっと私といっしょなんだもんねー」

＊

次の日、学校へ行く途中にばったりガキ大将に会った。ガキ大将は何も言わなかったが、私の顔を見た瞬間、目玉が大きくなるほど驚いたみたいだった。私が軽く睨んでやると、ガキ大将もきつと睨み返してきた。そして、ふっと口元に笑みを浮かべると、小走りに学校へ向かっていった。

学校へ行くと、いつものようにクーちゃんについて質問をしてくるクラスの子たちが、私の方を見ながらひそひそと何かを話しているのだ。この空気、この感じを、私は知っている。幼稚園の頃にも経験したことがあった。冷たい眼差し、ひそひそ声。まぎれもない仲間はずれだ。

帰り道、後ろから土を投げられた。授業中、話し合いの輪に入れもらえなかった。悪口を言われた。だけど、そんなことは気にしない。そういう卑劣な行為を行っている奴には、後から罰が当たる

のだ。

散歩に行く時にも、その行為は続いた。だから、私はクーちゃんを散歩へは連れて行かない。あんなトレーナーの元で育ったクーちゃんを、これ以上苦しめたくなかったというのもあったけれど、何よりもガキ大将の憧れの的だったからだ。

「チビ！ 泥棒！」

そう言われて、男女共に私に土を投げつけてくる。私がそっぽを向いて無視をするので、面白くないらしく、ますます土の量は増えていく。

「虫ポケモンを飼っているだけに、無視かよ！ アハハ」

——クーちゃんのことをバカにするな！

「うるっさいわね。いい加減幼稚なことはやめたら？」

思わず漏れた言葉に、再びガキ大将の顔がしゅわっと真っ赤になった。「くおの……！」と太い声を上げながら、そばにあった拳二つ分ほどの石を持ち上げる。

「ちよっ、まずいって！ そりゃあ、やばいよ！」

「落ち着いてっ」

周りの子が止めようとするのもむなしく、ガキ大将はよろけながら私の方へ向かってきた。

逃げなくては。今すぐに。

そう思えば、足が棒になったように動かなかった。ガキ大将のトマツのように真っ赤な顔だけが、目から放せない。まるで、？かなしぱり？を受けたようだった。

「うおおっ」

ゆっくり、ゆっくりと、石が宙を舞う。

クウウー！ と、澄んだ音が波紋のように響き渡った。その瞬間、私と石の間に緑の風が滑り込んだ。ドウツと、鈍く痛々しい音が私の心に広がった。

「クー……ちゃん！」

やっど？かなしぱり？が解けたのでとっさにしゃがみこみ、私はクーちゃんを抱き上げた。石が当たった腹の部分に手を添えると、クーちゃんは身をよじった。クウ……と低い声を漏らしている。しかし、よろよろと私の腕から離れ、私をかばうように立った。私の盾になろうとしているのだ。

「クーちゃん、家でおとなしくしててって言ったのに」

クーちゃんがそばにいてくれるというだけで、いつしか重くなっていた心がふっと軽くなった。

しかし、ガキ大将たちは私をかばう者の登場が面白くないらしい。「なんだよ、虫のくせに！」と口々に罵りながら、小石を雪合戦でもするように投げ出した。ひゅんひゅんと、小石が飛び交う。

次々に小石がクーちゃんに当たり、クーちゃんはその穏やかな目で必死に奴らを睨みながら、顔を背けて立っていた。クウウウウウ……と唸っている。

「やめて、よしてよ！」

私がそう叫んでクーちゃんの前へ出ようと立ち上がった時だ。クーちゃんの紅色の両目がキツと碧色に鈍く光り、ぶうううんと虫が羽を飛ばたような音が波のように連鎖して響き渡った。

「クー、ちゃん……っ」

背筋がむずがゆいような、奇妙な恐怖が全身を満たしている。

クーちゃんを中心に、虫ポケモンの匂いのする生温かい風が吹き荒れた。

「う、おっ!？」

気がつけば、ガキ大将も含め男子や女子たちは皆しりもちをついていた。ギシギシギシと、羽音のようなものがまだ響いている。

「お、俺、こえええ……」

「む、虫のくせ、に……なによ……」

「やめろよ、そんなこと言って、またしてきたらどうすんだよっ」

「俺、帰るわ」

「あたしもっ」

「お、おとお、俺もお！」

「あ、大将待ってよー」

またしても、気がつけば誰もいなくなっていた。情けない奴ら！根がよわっちいからそういうことになるのだ。

男子や女子たちがいなくなると、すぐにクーちゃんが苦しそうに喘ぎ出した。フラフラと頼りない足取りで私の元まで来て、倒れこむ。

「クーちゃん……ありがとう」

男子や女子たちへの怒りを覚えるとともに、罪悪感を感じて胸の奥がちくりと痛んだ。

家へ帰ってお母さんにクーちゃんを安静にしてほしいということ、今日の出来事を話した。すると、お母さんはうんざりしたようにため息をつき、頭に手をやった。

「だから言ったのよ。あなたはまだポケモンを飼える年頃じゃないって」

さらさらと流すように、早口に言う。

「ベテランのトレーナーでも、最近色々な事情でポケモンを逃がす人だって出てきているみたいじゃない。それなのに、あなたがポケモンのお世話なんて出来るわけないって、お母さんもお父さんも最初から思ってたわ」

自分の勝手な事情で、ポケモンを逃がす奴。ポケモンがどんなに主人を慕っているかを考えず、逃がす奴。クーちゃんを捨てた、少年の顔が頭に浮かび、思わず唇を噛み締めた。

お母さんは、まだ続けている。

「元々はそのハハコモリ、トレーナーのポケモンだったんでしょ？ 捨てられちゃったけれど。じゃあ、あなたもそれを見習えばいいじゃない。ポケモンを持つのは、もっと大きくなってからよ。ポケモンと人間には、そういったことも必要なの」

それ以上は聞きたくなかった。恐ろしくて、頭の奥がキーンとし

た。

「うまく関係を築くためにはね」

「お母さん……嫌」

「ポケモンが原因でいじめられてたら、元も子もないでしょ。所詮、ポケモンと人間には違いがあるのよ」

「……お、かあ、さん……っ」

「お母さんは、もうサヨナラすることをオススメ……」

「お母さん！」

耐え切れなくなった私は、押さえ込めていた気持ちを吐き出すように大声を上げた。お母さんは、びくともしない。

「なあに？」

クーちゃんを逃がすなんて嫌だ。自分勝手な事情に、ポケモンを巻き込みたくない、大人げないよ。最低。

色々なことが言いたかったが、胸がいっぱいになって声が出なかった。だから、これだけは言ってやった。

「子ども扱い、しないで……！」

最後の方は声がかすれた。お母さんの返事を聞くことが恐ろしかったから、そのまま逃げるように自分の部屋へ駆け込んだ。

私のベッドには、今、クーちゃんが横たわっている。私が込み上げてくる感情を抑えて顔を火照らせているのを見て、クーちゃんは心配そうに起き上がった。

クー……？ という澄んだ鳴き声を聴いた瞬間、何かかはじけた。涙が目からみるみる溢れ出した。声をあげて泣きたいのに、何かにせき止められて泣くことが出来ない。もやもやる思いは溜まるばかりだ。肩がぶるぶる震えている。

ベッドに突っ伏して嗚咽していると、クーちゃんの手が私の頭に触れた。心配をかけてはいけないと思って大きく息を吸い込み、泣き声を止めようとすれば、ぶくっとはじけてしまう。

みんな、バカだと思った。ガキ大将も、クラスの男子も、女子も、お母さんも、クーちゃんを捨てたあいつも、みんなバカだと思った。

私はもう、小さい子なんかじゃない。クーちゃんを逃がすことと、私の歳は、まったく関係ない。

フウツと体が柔らかく浮いている感じがした。見ると、私の体がオレンジ色に淡く光っていた。クーちゃんも同じ光に包まれ、光と光がつながっている。

「……？しんぴのまもり？……？」

クーちゃんは、私のこれを状態異常だと考えたのかもしれない。その優しさが、泣きたいくらい嬉しくて、声にならない声になって、心の中に何かが染み渡った。お母さんのおなかの中に入るような、幸せな……何かが。

いつしか、ロン、ロロロン……とハープのような音も響いてきた。クーちゃんの鳴き声だった。

「クー……ちゃ……」

私は、クーちゃんをきつく抱きしめた。

＊

「ええ？ 旅行に行くの？ 一週間も？」

突然のお母さんの話に、私はとまどっていた。クーちゃんは、相変わらず私の足の後ろに隠れ、顔だけ出してお母さんをじっと見ている。

お母さんは、機嫌がいいのかにこにこしながら言った。

「そうよ。でも、いろんな乗り物に乗るだろうから、ポケモンにはつらいと思うの。それに、ホテルにはポケモンをいっしょに連れて入れないのよ」

「じゃあ、クーちゃんを家においていけって言うわけ？ そんなの嫌だ！」

私は、クーちゃんを抱き上げて言った。

すると、お母さんはどこからかパンフレットを持ってきて、私に見せた。「育て屋のご案内」と書いてあった。

「ここにポケモンを預けることが出来るの。お世話が出来なくなつたトレーナーが預けるくらい有名で便利のところよ。庭はポケモンたちが住む自然を再現してあるんですって。ほうっておいても、ポケモンはレベルが上がっちゃうくらいなの」

「ふうん……」

まだ納得のいかない私は、低い声で答えた。

お母さんは、さらに微笑む。

「ハハコモリは虫タイプだから、草木が大好きでしょ？ たまには、野生ポケモンの気分を味わらせてもいいんじゃないの？」

クーちゃんは、あの少年のポケモンになり、捨てられ、私といっしょに暮らす前までは、野生ポケモンだったはずだ。確かに、ずっと人間といっしょに家で暮らしていて、窮屈な思いもしているかもしれない。クーちゃんには、迷惑をかけてばかりだし、それもいいかもしれない。

「わかった……。クーちゃんを預ける……」

「じゃ、決まりね！」

お母さんは、さっそく電話をかけ始めた。

「クーちゃん、楽しんできてね」

私がそういつて頭を撫でてやると、クーウとクーちゃんは優しくに笑った。

＊

クーちゃんの具合がよくないと連絡が来たのは、私が旅行から帰ってきて、クーちゃんを迎えに行く直前だった。詳しい事情は後で話すから、すぐに来てほしいと言われた。お母さんとお父さんは用事がある。一人で行くしかない。

クーちゃんの名前を何度も呟きながら、私は駆け出した。

＊

「クーちゃん、大好き！」

色々なことを励ましてくれるたびに、そう言った。

「クーちゃん、ごめんね」

色々なことで迷惑をかけるたびに、そう言った。

クーちゃんは、いつでも私のそばにいて、温かな目で私を見ていてくれた。

それなのに、私が育て屋さんを信じたばかりに……。

＊

「二日前くらいから様子がおかしくてね、体の色がおかしくなりだしたんだよ。声もガラガラで、苦しそうだった。その前までは、糸と葉っぱをつかって何かを作ってたんだ……。嬢ちゃんにあげるための、何かを……多分、手袋だ」

おじいさんの声は、耳に入らなかった。ただ、今すぐクーちゃんに会いたいと思った。

「クーちゃんは？　クーちゃんは今どうしているの？　まだここにいるんでしょ？」

なんとか無理に泣き止み、まだ震える声で私はおじいさんに詰め寄った。おじいさんも、震える声で「ああ」と答えた。

「お庭にいるよ。ベッドに連れていっても、そこに戻ってしまうから。よっぽど嬢ちゃんへのプレゼントを作りたいらしい」

私は、庭への扉を乱暴に開けて、クーちゃんを捜した。

「クーちゃん……！」

クーちゃんは、庭の端の方の草の上に横たわっていた。そばに、手袋のようなものが一つだけある。

「……！」

声が出なかった。

クーちゃんの体は、まるでカビが生えたかのように汚れていた。

声も、あの澄んだ声ではなく、グズズウウ……というような、聞いているだけでこっちが苦しくなってくるかれた声。あまりの変わりように、涙も渴いてしまった。

「こんなになるまで……私に……手袋……」

私は座り込み、クーちゃんを膝の上に乗せてやった。生気を失った赤い目に、私の姿が映っていた。

グズウウとクーちゃんが鳴き、体をよじって手袋を指差した。そして、かすかに笑ったように見えた。

「ありがとう……ありがとう……」

肩の震えが止まらない。

「ああ、クーちゃん……よく……」

おじいさんの弱々しい声が聞こえた。すると、ガサツという足音がした。こんな時に、と腹立たしく思いながら振り向くと、あいつがいた。私が大嫌いな奴だ。

「ハハコモリ……」

そう、クーちゃんを捨てた少年だ。

こんな時に、よりもよってこんな奴と会うとは。心の中に、怒りが広がった。

「あんた……って奴は！ どうしてこんな所まで来るのよ！ クーちゃんを捨てたくせに！」

少年は、すっとんきょうな声をあげた。

「クーちゃん？ クーちゃんって誰だよ」

「誰って、このハハコモリに決まってるでしょ！」

クーちゃんを捨てた本人の的外れな質問と、クーちゃんに対する思いとで、涙が込み上げてきた。

「クーちゃんは、あんたのせいでつらい思いをして……っ、それなのに私に優しくしてくれて……っ。強い虫ポケモンだったよ……っ！」

「……」

少年は、私の隣にしゃがみこんでクーちゃんの様子を黙って見つ

めた。クーちゃんが、少年を力なく見上げた。

「お前……」

クーちゃんの今の様子に、少年は驚いたみたいだった。唇がかすかにびくびくしている。クーちゃんの目に少年がしっかりと映っている。ふっと、小さくクーちゃんが微笑んだ。そして、最後に私を見やり、笑いながら大きく一つ息をして、そのままもう息をしなくなった。

ガクツとクーちゃんの重さが太ももに伝わった。垂れた手は、手袋の方を向いていた。

「クー……ちゃ……」

クーちゃんが、死んだ。

また、だ。大声で泣きたいのに、泣くことが出来ない。最後まで、クーちゃんに情けない姿を見せてしまった。

クーちゃんは、私に贈り物をしてくれたのに。私は、何もすることが出来なかった。泣くことすら、出来ない。ただ、大きく肩と唇を震わせていた。

少年は、黙っていた。

おじいさんに、クーちゃんをきちんとポケモンたちのお墓の所へ埋めてあげるかい、ときかれたけれど、私は断った。クーちゃんのふるさとに、クーちゃんを戻してやりたかった。少年によれば、クーちゃんのふるさとはすぐ近くの森だと言う。そこで、まだクルミルの時に出会ったそうだ。

しかし、今はそんなことをする気分ではない。クーちゃんの亡骸をおじいさんに預け、手袋を持って、私は育て屋を出た。なんて薄情なんだろう、私。夕焼け空が、心に沁みる。気がつけば、あの少年がいない。自分でもわからないけれど、なぜか少年の姿を捜した。少年は、すぐそばの道をゆっくりと歩いていたところだった。

「ちよつと……」

呼び止めると、少年が立ち止まった。こちらを振り返らずに。そ

して、やけにぶっきらぼうに言った。

「なんだよ」

「あの、あの」

クーちゃんの最期が、頭に浮かんだ。

「クーちゃんは、喜んでたよ」

「あっそ」

「あんたに会えて」

「ふうん」

少年がかすかに振り返った。顔が見えない程度に。耳が、赤かった。

「バカか、お前。俺はあいつを、その……クーちゃんを……捨てたんだぞ」

「知ってる。でも、喜んでた」

確かにあの瞬間、クーちゃんは笑っていた。それは、こいつに会えて嬉しかったからだ。きっと。

少年が、再び顔を動かした。ちらりと横顔が見えた。目が、光っていた。

「っそ……」

オレンジ色の黄昏の中の様子が、いつかのクーちゃんの？しんぴのまもり？のようだった。しかし、ハープの声は聞こえなかった。

＊

学校へ行くと、それまで私のことを男子と共に避けていた女子たちが、心配して声をかけてきてくれた。

しかし、私は決してそいつらを許さなかった。許すものか。クーちゃんが病気になったのは、半分こいつらのせいなのに。石を投げ、罵声を浴びせたりしたから！ だから、片っ端からこいつらを責めた。「あんたたちのせいでクーちゃんは死んだのよ！ いっしょになっていじめてくるから、ストレスだって溜まってたんだよ。」

どうしてくれるの！」と。女子たちは最初のうちは「ごめんね」と謝ってきていたけれど、私の怒りは治まらない。「謝ってすむなら警察なんていらないじゃん」と言い続けていると、いつしか女子たちは再び私から離れていった。「あそこまで言うことないよね」という噂はどんどん広がり、しまいには「前からあの子って嫌だなんて思ってたんだよ」とか「ポケモンを持ってるからって偉そうにしてさ」とか、過去のことをごたごた言うようになった。

構うもんか。クーちゃんは、もう帰ってこないのに。こんな奴らと仲良くするくらいなら、一人の方がよっぽどいい。

ガキ大将や男子たちにも、文句を言ってやった。何度も、何度も。「あんたたちがあの時、土を投げてきたから！クーちゃんが助けに来て！石がぶつかったから病気になったのよ！」

しかし、奴らはガキ大将を中心に、謝りもせず悪口ばかり言った。「なんだよ、しつこい女だな！虫ポケごときで。虫なんて弱いポケモンを連れてたのがいけねえんだろ。無視だ、無視」

謝りもしないなんて、女子以下だ。弱いのは、お前たちなのに！育て屋のせいにもしてやった。ちゃんと世話をしなかったからだ、クーちゃんを見捨てたからだ、と罵ってやった。

クーちゃんとサヨナラをしろと言ってきたお母さんにも、あの時クーちゃんにそれが聞こえてきたかもしれない、と言ってやった。そもそも、あの時旅行に行こうなんて言ったからだ、と言ってやった。

これはウソ。旅行に賛成したのは、私だ。だけど、元々お母さんが誘ってこなければよかったんだ。

すると、お母さんはぴしゃりと一言、こう言った。

「人のせいにするのはやめなさい！」

＊

そう言われてからは、頭に衝撃をくらったような気がして、思わ

ず外に飛び出した。

青く澄み渡った空が、クーちゃんの澄んだ声を思い出させる。
あの少年がクーちゃんを捨てる瞬間を見た時、私は……。

——「ポケモンのせいにするなんて、人として最低！」

そして、ガキ大将がクラスの人気者の座を私に奪われた、と言っていた時、私は……。

——「人のせいにしないでよ！」

一番誰かのせいにしていたのは、私だった。一番相手のことを考えていなかったのは、私だった。

クーちゃんが死んだのが信じられなくて。クーちゃんや私をいじめていたあいつらが許せなくて。クーちゃんがそばにいないのが寂しくて。やりきれなくて。独りぼっちが……つらくて。

原因がわからない病気というのに腹が立った。だから、誰かのせいにしたかった。本当は、誰のせいでもないのに。

すぐに勝ったと思い込んで。大人ぶって。強がって。人のせいにして。

一番の悪者だったのは、私だった。

本当は、悔しかった。みんなに子ども扱いされることが。わけのわからない病気が、クーちゃんを死なせたことが。

本当は、ずっと寂しかった。クーちゃんだけが頼りだったのに。クーちゃんはもう、いない。

——ごめんなさい、ごめんなさい。

——もう、一人は嫌なんだよ。ずっと寂しかったんだよ。

涙が後から、後から流れた。私は大声をあげて泣いた。

とん、と後ろから右肩に手が置かれた。大きな手だった。あの少年だと思った。

「育て屋が、呼んでるぞ」

聞き覚えのある声がした。

そつと、手が離れた。

「じゃあな」

「待ってよ」

振り返ると、あいつがいた。

「ありがとう」

私がそう言うと、ぎこちなくガキ大将は笑った。

＊

育て屋へ行くと、あの少年といっしょにおばあさんが待っていてくれた。おばあさんは、手に包みを抱えている。私がそばへ寄ると、震える唇で言った。

「あんたのハハコモリはメスだったね」

「は、はい」

それを聞くなり、おばあさんは震える手で包みを差し出した。

「タマゴを産んでおった……」

「タマゴ……」

包みを開いてみると、緑色の大きな斑点があるオレンジ色のタマゴだった。温かいタマゴを抱いていると、胸の奥に幸せな気持ちが広がった。

おばあさんは、涙ぐんでいた。

「茂みの中に隠れていたんだよ。ハハコモリは、子ども思いの優しいポケモンだからね。……お嬢ちゃん、ハハコモリの手袋みたいなものを持っているかい」

「はい、ここにはないんですけど……」

「あれはね、お母さんが子どものクルミルにあげる、服なんだよ」

「そ……っかあ」

ハハコモリは、優しいお母さんだね。

「じゃあ……もう帰ります」

「ああ、お嬢ちゃん。その子のお父さんはそこにいる……ちゃんが預けた……」

そんなことは、どうでもいい。

私はおばあさんの声を振り切って、育て屋を出た。「お、おい」と少年も追いかけてくる。

クーちゃんは、私にプレゼントをくれたわけじゃなかった。そう思うと、悔しいような悲しいような思いが広がった。

「本当の、独りぼっち……」

友だちなんていなくても、クーちゃんがいればいいと思っていたのに。クーちゃんは、ハハコモリは、私のことなんて思ってた。それもそうだ。私は、ハハコモリを一週間も「放置」したんだから。育て屋というボックスの中へ。

「あいつは、お前のことを慕っていたよ」

今度こそ、私の右肩にあいつの手が置かれた。

私の肩が、震えた。

「笑ってたじゃねーか」

それでも、クーちゃんはいない。

「でも、どうせ、もうクーちゃんはいないんだよ。一人なんだよ！」

「いい加減、出てこいよ。タマゴから」

お母さんに言われた時と同じ、頭に衝撃が走った。

少年は回りこんで、私の目の高さに合わせてかがんだ。

「これ以上、ク、ク、クーちゃんに執着するなよ。いつかはお前だって、その愛しい殻を割らなきゃいけない時が来るんだよ。そんなのクルミルのようにさ」

「……」

「お前が素直にならなきゃ、みんな素直にならないぜ。お前、俺がクーちゃんを捨てた時、俺にすっごく怒ってたよな。あの頃のお前

が、クーちゃんだって好きだったんじゃないの？　この中のクルミ
ルだって」

「……」

「お前のトモダチは、産まれた時からじゃない。タマゴの時から、
もうトモダチだ」

……そうだ。私は一人じゃない。どんなに嫌な奴だって、クラス
の子やお母さん、お父さん、育て屋さん、こいつだっている。

そして、育て屋さんの言葉。この子のお父さんは、なんとかが預
けたって言っていた。

「この子のお父さん、あんたのハハコモリでしょ？」

少年は、へへと笑った。

「俺、タイプ相性だけで勝負は決まらないってこと、あの後に知っ
たんだ。シンオウの四天王の虫使いが挑戦者の炎ポケモンを倒して
いるところを見て、俺はおまえの言うとおり、最低だったなって。
だから、一から育てなおしたんだ。それに……」

「何？」

「お前はもう、殻を抜け出しているよな。あの時、あんなに泣いて
たから。本当は俺がお前を呼ぼうと思ったんだけど、あの姿を見た
ら……な。だから、あいつに頼んだ」

私は、この人に呼んでほしかった。

へへへと再び笑うと、少年は私の頭に手を乗せた。温かな、ポ
ケモントレーナーの手だった。

「お前は一人じゃない」

そう言い残すと、少年は立ち去っていった。

＊

掘り起こした土の、甘い香りがする。

私と少年は、クーちゃんの亡骸をふるさとの森に埋めた後、一本
の木をそこに植えた。

「俺、また新しい虫ポケモンを捕まえようと思うんだ」
少年が、頭をかいた。

「その時は、タマゴの中のクルミルと……会えるといいな」
「そうだね」

私が微笑むと、少年は立ち上がった。

「じゃあな」

一言言うと、立ち去ろうとした。とっさに、私は叫んだ。

「待って！」

「なんだよ」

今度は、横顔だけが見えた。耳が、赤い。

私は大きく息を吸うと、小さく言った。背筋がむずむずするようで、恥ずかしかった。

「ありがとう。『クーちゃん』……」

ピクツとクーちゃんの唇が動いた。

「どうして、俺の……」

「クーちゃんが死ぬ前、育て屋のおじいさんがあなたが来た瞬間に、『クーちゃん……よく……』って言ってたから。それに、おばあさんも、クーちゃんのお父さんのことを『そこにいるなんとかちゃんが預けた』って言ってたから……」

「……」

クーちゃんが、こちらを振り向いた。頬も、赤かった。

「その時は……お前と……会えるといいな」

＊

「ミーちゃん、？たいあたり？！」

クルミルのミーちゃんが、ミイイイ！ と鳴いてダッシュした。

「フシデ、かわせ！」

クーちゃんが、慌ててミーちゃんの攻撃への対処の指示を出す。二匹のポケモンは、にらみ合いながら相手の出方を探っている。

私とクーちゃんは、お互いに微笑みあうと、同時に叫んだ。

「行け！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7383t/>

ポケモン短編集

2011年6月1日19時40分発行